
便所飯

尾綿洋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
便所飯

【コード】
N5755T

【作者名】
尾綿洋

【あらすじ】
孤独で便所飯までしている暮地歩。彼に友達は出来るのだろうか。

ジリリリリッ：ガチャッ。只今の時刻朝8時、天気は曇天、憂鬱な1日がまた始まる。

バシャツと冷たい水で顔を洗い、いい加減に髭を剃り、台所に向かい湯を沸かす。昨日買っておいたカップ麺に沸かした湯を入れ粗末な朝食を摂る。そして、今日の授業の用意をし、そこら辺に転がっている服の中からまともそうなものに着替え家を出た。

大学まで十分程度、1限には余裕で間に合いそうだ。僕の名前は暮地歩。大学2年生。恋人はいない。それどころか友達もいない。サークル活動やバイトの類もしたことがなくついでに興味も将来の夢も無い。無味乾燥な毎日を送っている。

きらびやかな大学生活に憧れ都会に引越し一人暮らしを始めたはいいが、如何せん無趣味な上、孤独なため外の浮かれた空気と真逆な生活をしているため外界と自分の日常とのギャップに苦しんでいる。

そんなこんなで授業が始まる。今回の授業は微分積分学だ。数学は苦手で授業を聞いても理解が出来ないが授業の終わりに授業でやった事に関するレポート提出があるから気が抜けない。こんな時友達がいたらわからないとこ教えてもらって簡単にレポート出せるのにと思ってたがそうもいかない。必死に授業を聞く、わからなくても聞く、授業の90分がとても長く感じられた。

キーンコーンカーンコーン。授業の終わりを告げるベルだ、僕はレポートを提出した。半分も出来なかった。しかし、ここで落ち込んではいられない。次の授業は嫌いな語学だ。

教室に入り席に着くと鼓動が早くなり手が汗ばんできた。教授が教室に入ると、二人組を作るように指示を出した。周りは次々とペアを組んでいくのに対し僕は組む人がいない。ちょっと離れた窓際

の人に組んでもらおうか。

「あ…、あのお」

「何ですかもうペアはいますよ」

というと、その人のそばに中背の男が向かっていた。

仕方なく席に着くと

「おや？君一人かい先生が組んであげようか！」

「…」

「冗談、冗談、その人、三人組になるけど混ぜてやりなさい」

僕はとぼとぼとその二人組に混ぜてもらうことにした。するとクスクスと嘲笑する声が聞こえた。早くこの場から消え去りたいと思った。

ペアづくりに加えさらにこの授業でやらかした。英語で趣味について会話するというものだが僕には趣味が無かった。仕方なく音楽鑑賞といったが好きなアーティストと聞かれミスチルと答えたが、相手はそれに興味を示し、ミスチルのあの曲はこういう所がいいよね、で君はと聞かれると何も答えられなかった。出てくるのは、あ、とかうっ、とか、えっとなんかの言葉ですらない言葉。それを聞いた相手はすぐさまもう一人の人と話し始めた。それ以降僕は蚊帳の外だった。

授業が終わると昼食の時間だ。売店で弁当を買い、それを持って5号館1階のトイレへと向かった。トイレへ入り腰掛けると弁当を食べ始めた。何故食堂で食べないのかというと、食堂にいる人のほぼ全員が友達や恋人と食べていて独りで食べていると異質なものを見るような視線をひしひしと感じて、とてもでないが落ち着いて食べられないからだ。空き教室という手もあるがそこでも同じことだった。唯一落ち着いて食事を摂れる場所がここだった。

黙々と食事を摂っていると外から賑やかな声が聞こえた。あの集団の中に入るのは無理だと悟っていた。しかしながら友達と会話してみたいという願望もあった。しかしながら、所詮は便所で飯を食

べている人間。入学して以来同年代の人間と会話したことが無かった。会話…というか言葉を発したのはコンビニで

「レシートいりますか？」

「あつ…要らないです…」

といった程度しかなかった。

黙々と食べつつ、仮想の友達と遊んだり会話をする妄想をする。只々虚しかった。

そうこうしている間に弁当の中身が無くなった。持ってきた漫画本で時間をつぶす。次の授業は熱力学。理解するのが難しい科目だ。逃げ出して帰りたいと頭の中でぶかーつと浮かんだ。

いよいよ授業の時間が迫ってくると漫画を鞆の中にしまい、弁当の空箱と鞆を持ってトイレから出た、弁当の空箱を捨てると教室に入った。中に入るとすでに人がいっぱい喧騒が耳と心を痛みつけた。

授業が始まると必死に板書を書き写した、理解はほとんど出来なかったが、こうして集中していると周りの視線や雑音が気にならなくなり、幾分か気分が楽になった。

授業が終了すると僕はスーパーに行った。料理をするのが面倒臭いから、カップ麺2個と出来合いの弁当とお菓子のポテチを買った。買い物済むと家に帰り横になりながらテレビを観ていた。面白くは無いが情性で観ていた。そして、12時を回る頃寝た。こうして1日が終わった。

あれから一週間後、いつものように授業が終わわり昼休みに入ると弁当を買い5号館1階のトイレへ向かった。しかし、トイレ2部屋とも占領されており仕方なく2階のトイレへと向かった。1部屋はすでに人が入っていたので隣のトイレで弁当を食べることにした。しかし、隣からなにか匂いがする。たまにだが大便をの匂いがする

ことがあるがいつものそれとは違う。ご飯の美味しそうな匂いが壁越しに伝わってくる。そして注意深く耳をそばだてるとむしゃむしゃとごはんを食べる音が聞こえた。

びっくりして心臓が激しく脈打っている。そして、隣にいる人と同様に弁当を食べ始めた。なかなか食べ物を掬えないばかりか、飲み込むのにも苦労した。ここである考えが浮かんだ。隣の人と接触を図ってみようと。すると、3分ばかりためらった後実行にうつすことを決意した。横の壁をトントンと叩いた。しかし、反応がない。もう一度叩いてみるやはり反応がない。そして声を掛けることを決意した。恐る恐る

「あ、あのう、あっ…あなたも食事をしているのですか？」
と尋ねてみた。すると。

「えっ…、あっ…、はい…」

弱々しい返事が返ってきた。すかさず。

「ぼっ…ぼぼ僕もいつも、とっトイレで、た、食べてるんですけど、き、君は？」

「ぼっ僕もそうなんです、いっいつもこのご、5号館の、に、2階のとっトイレで…」

「僕はいつもしっ、下の階のトイレで食べてるんだ…」

「そ、そうなんだ…。この階で食べるのはっ、初めてですか？」

「うん…、初めて下のトイレが使えなくなってさ。あはは…」

「ところでさ、君の名前を教えてくださいかな？」

「ぼっ僕の名前は日戸里和人です…。よろしく…君の名前は？」

「暮地歩です。よろしく。久しぶりに人と会話したよ君は？」

「ぼ、僕も同じです…と、友達も居なくてこうしてトイレに籠るようになったちゃって…」

「似たもの同士だね。僕達友達にならない？」

「ほ、本当ですか！？是非お、お願いします」

「弁当食べ終わったらメアド交換しよう！」

「う、うん」

こうして勢い良く弁当を掻き込んで食べ終わるとトイレのドアを開け日戸里君を待った。

「お、お待たせ」

中から出てきたのは小柄で色白で眼鏡をかけた青年だ。お互い携帯電話を取り出すと

「ぼ、僕どうやってメアドこっ交換するのか、わ、わからないんだけど…」

相変わらずつつかえて喋りにくそうに尋ねてきた。

「大丈夫、ここをこうやって、こうすると…ほら出来た」

「あ、ありがとう」

「初めて大学でメアド聞けたんだ。これからもよろしく」

「ぼ、僕からもよっ、よろしく」

「これから授業だね日戸里君は学科はどこで何の授業？僕は機械工学科で材料力学」

「ぼ、僕は電気工学科…」

「じゃあ授業で会うことはほとんどないのかな？まあいいやじゃあね」

「じゃあ…」

こうして日戸里君と別れた後授業に臨んだ。だが、興奮と嬉しさのあまり集中できなかった。

家に帰ると早速メールで明日食堂で食事をしようとメールした。

相手は快諾し、目印として白いＴシャツに青いジーパン、茶色の力パンを持って行くと伝えたが、ありきたりな格好で日戸里君にはわかるのか不安になった。

翌日、ジリリリリッ…ガチャツ。時刻は8時。いつもとは違うつきついた気分が目覚める。朝食のカップ麺を食べ、パシヤツと音を立て顔を洗い、丁寧に髭を剃り、前日用意した白いＴシャツに青いジーパンに着替え、授業の準備をする。1限には余裕の時間だ。

そして、1限、2限と終わり大学生生活二年目で2回目の食堂へと向かった。食券を買い食べ物を受け取り、2人掛けの席を見つけそこへ座った。5分後食べ物を持った日戸里君が姿を現し席に着いた。「やあ、日戸里君。こんにちは」

「こ…こんにちは」

「緊張しないでいいぜ俺達友達だろ」

「うん。ありがとう。こんな事言ってくれるなんて…嬉しいよ」

「やっぱ、トイレで食う飯より美味しいな」

「本当だよな。あはは」

こうして僕と日戸里君と打ち解けることが出来た。後に彼は親友となり昼休みはいつもこうして食事をした。そして、他愛もないことや将来の夢を語り合った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5755t/>

便所飯

2011年5月26日22時40分発行